

日本におけるベートーヴェンの楽譜出版

ーベートーヴェン受容史の一側面ー

長谷川由美子

はじめに

日本におけるベートーヴェン受容史については既に 3 つの重要な文献がある。一つは西原稔の『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』^{注1)}であり、次は福本康之の一連の論文『日本におけるベートーヴェン受容』^{注2)}である。内容は重複するが西原、大角、福本による講談社のベートーヴェン全集第 10 巻に掲載された論文^{注3)}も見逃せない。1999 年から 2002 年のごく短い時期に相次いで書かれた文章のおかげで、私たちは日本人がいかにベートーヴェンの音楽を論じ、演奏し、聴き、そして、いかにベートーヴェンを敬愛したかを如実に知ることが出来る。これらの論文を踏まえて、今回の調査では上述の文献ではあまり取り上げられていなかったベートーヴェン作品の楽譜出版に焦点を当ててみた。

調査は明治年間から昭和 20 年までに限定した。楽譜はベートーヴェンの名前で出版されるものに限らず、讃美歌、唱歌、歌曲集、合唱曲集、教科書、雑誌、ピアノやヴァイオリンのメソッド等、多岐に渡っている。調査したすべての出版楽譜データは文末に表として掲載した。

明治時代の唱歌に関しては大部分を『国立音楽大学音楽研究所年報第 4 集：唱歌教材目録（明治編）1980』と『国立音楽大学音楽研究所年報第 5 集別冊：唱歌索引（明治編） 1. 曲名・歌詞索引 1984』によっている。明治時代の讃美歌については手代木俊一編集による『明治期讃美歌・聖歌集成』^{注4)}を利用した。大正、昭和に関しては調査の初段階で、国立音楽大学附属図書館南部好江さんが作成した、膨大な『唱歌童謡索引大正及び昭和 20 年まで』（仮称）のデータベース（未発表）の提供を受けた。おそらく表の半分は彼女のデータがなければ発見できなかった楽譜である。多くの感謝とともに、一日も早くこのデータベースが公開されることを望んでいる。表に掲げた曲（曲集）は、楽譜の広告ページから採った重要ないくつかを除き、二次資料にはよらずにすべて内容を確認した。

1) 明治期のベートーヴェン楽譜 唱歌になった歌曲と器楽曲

最初に印刷された楽譜は、現段階では作品 48 の 4 : Die Ehre Gottes aus der Natur『自然における神の栄光』である。明治 22 年に『君は神』という題で中等唱歌集^{注5)}に掲載された（訳詩一覧参照）。作曲家、歌詞作者ともに明記されていないが、種々の資料から「里見義」であることが判明している。曲は演奏会でもたびたび取り上げられた。そのもっとも早い例は明治 18 年 7 月 20 日午後 2 時から上野公園地内文部省新築館で行われた音楽取調掛卒業演習会手続書における演奏会である。遠藤は、エック

ルトが選曲指揮をしたと述べ^{注6)}、「卒業式などで必ず演奏」^{注7)}と注をつけている（明治22年6月24日、明治31年7月9日、明治31年12月4日）^{注8)}。原曲は独唱とピアノだが、すでに1834年にはピアノ伴奏を伴った4部合唱に、1836年にはピアノ、あるいは管弦楽伴奏付きの男声4部合唱に編曲されている^{注9)}。したがってエッケルトが編曲したのではなく、広く流布していた楽譜を使用したのであろう。ドイツの出版社ばかりでなく、現在でも合唱曲のレパートリーの一つとしてイギリスやフランス、日本の出版社からも継続的に出版されている。

『君は神』の訳詩は明治期を通して一般に見られる「嵌め込み唱歌」^{注10)}とは多少異なる。歌曲というより、器楽曲の主題を思わせる弱起ではじまる跳躍の多いメロディー、度重なる転調は、唱歌教育課程初期の日本人には非常に難しかっただろうと想像される。しかしその雄大な曲想は、「皇統連綿、万世一系、天壤無窮」^{注11)}といった明治の国家観に利用された。その後の『さかゆく大御代』（作詞者不詳）、『君は神』（森迫武）、『祝へ我が君』（佐々木一二）、天壤無窮（水田詩仙）等同じ傾向が続き、原曲の「神」が「天皇」にその場所を譲ったのである。

さまざまな訳詩の中でひとときわ目を惹くのは、近藤逸五郎（後の朔風）の歌詞である。近藤は『麗異』（訳詩一覧参照）が収められた『独逸名曲集』の序文で次のように訳詩に対する姿勢を述べる。

「・・・わが樂界に於て、莊嚴なる宗教歌に換ふるに花月の歌を以てし、艷麗なる戀愛曲に教訓の詞を加へて省かざるが如き、曲意を輕んずる弊あるを改め、併て曖昧なる歐樂の流行を、杆がむとする微意にはかならざるなり。音樂の表情は臃ろげにして、言語の如く特殊の感情を明かに示すものに非ず。されば歌詞を作るには、必しも逐語譯を用ゐざるもよけれど、全く樂匠の感得を無視するは、いはれなきことなり、なるべく原歌の意を汲みて、原曲の感興を存するこそ然らめ。」^{注12)}



独逸名曲集タイトル(歌詞部分)



独逸名曲集タイトル(楽譜部分)

近藤の訳詩の『麗異』は原曲どおりの形で出版された。曲集に収められたほかの曲も同様である。明治、大正を通して、原曲をそのまま用いる姿勢は注目に値する。表紙は東京美術学校を卒業したばかりの洋画家和田三造に依頼したカラーで、タイトルページは同じく東京美術学校教授であった和田英作の図案

に依った。楽譜も当時のドイツ、フランスでよく見られるようなブルーの飾り枠で囲まれたしゃれた作りで、近藤による詳細な解説を伴っていた。彼がいかにこの歌曲集の出版に情熱を燃やしていたのかが伺える凝った作りの曲集である。近藤はその後も第2集、第3集と続集を出版するつもりだったが、曲集の売れ行きは思いのほか悪く、続集を出版することができなかった^{注13)}。明治43年に近藤は天野秀と組んで、新しい曲集を出版するが、こちらの曲集に収められた『稜威』(訳詩一覧参照)は先の『麗異』を改定したものである。また、あれほど気負って原曲にこだわった彼であるが、新しい曲集では当時の一般的風潮に従って合唱曲の形式を採用して、前奏、後奏は省略され、間奏も一部がカットされている。近藤の『麗異』に見られる姿勢はあまりにも時代の先端をゆきすぎて、当時の需要に合わなかったのだろう。昭和4年、門馬直衛は原詩に忠実な新しい訳詩を出す。(訳詩一覧参照)しかし、原曲に基づいた詩のすばらしさゆえ、現在でもまだ近藤の訳詩は使われ続けている。

明治23年には作品52の7:Marmotte『モルモット』が『海路の歌』と『あすの日和』という2種類の歌詞によって印刷された。歌詞は両方とも大和田建樹で作曲者名は記載されていない。この曲は「嵌め込み唱歌」の見本のように、元歌とまったく関係のない歌詞によって繰り返し種々の唱歌集に掲載された。『海路の歌』と『あすの日和』以外の題名を列挙してみよう。『水鳥』『流水の曲』『秋の庵』『To-day and To-morrow』『花売』『橘姫』『霜夜』『千鳥』。

明治25年にはWoO126:Opferlied『奉献歌』が『三種の神器』という題名で「帝国唱歌」に掲載される。

作曲者名は記されていないが、編集者大和田建樹の緒言に「作曲ハ泰西の大家、モザート、ピーターベン、ウェバー、シューベルト、ドニゼッチー等の諸氏を始として、その他・・・」としてベートーヴェンの名前が挙がっている。なお、西原の著書^{注14)}の210ページには、大正15年9月11日に開催された「ベートーヴェンの思出」のプログラムが掲載されているが、その中の曲のひとつ、「アペルフイド」はこの『奉献歌』を指すのかもしれない(左図参照)。

東京音楽学校の演奏会でたびたび現れる『菊の盃(杯)』の原曲は作品20の七重奏曲の第4楽章、変奏曲の主題である。『東京芸術大学百年史演奏会篇』^{注15)}の629ページには武島又二郎作詩『菊の盃』として歌詞が掲載されていて、編集者による注には「原作者者 Beethoven 曲〈Nun bricht aus allen zweigen〉〈O Welt, du bist so schön〉〔異なる この二曲に同一歌詞を付けている〕」とあるが、同じ曲である。

作品108「25のスコットランド民謡」の第20曲『忠実なジョニー』

楽譜上部の数字譜は
前所有者が記したもの

もまた、古くから日本で親しまれた歌曲である。明治38年2月25、26日の学友会祝捷音楽会で独唱曲として登場したのを皮切りに^{注16)}、明治45年3月25日には乙骨三郎の詞による合唱曲『あゝ、いづちゆく』(訳詩一覧参照)^{注17)}、大正15年11月10-15日演奏旅行^{注18)}、大正15年11月22日^{注19)}と続く。同じ年の大正15年10月30日の学友会第45回土曜演奏会では原曲か訳詞かの判断はできないが、『忠



實なるジョニイ』が混声合唱で演奏されている^{注20)}。一方、楽譜としての初出は雑誌「音楽之友」掲載の『まこゝろの友よ（別歌）』（明治38年）（訳詩一覧参照）であろう。4部合唱（重唱）で、前奏、間奏、後奏は略されている。詞は「原歌の詞をかりて」の注釈どおり、別れの気持ちは現されているが、原歌のもつ素朴な愛の歌はどこにも見出せない。与謝野鉄幹詞の『こほろぎ』（訳詩一覧参照）と竹折錫の『松の葉』（訳詩一覧参照）は嵌込み唱歌である。大正9年「月刊楽譜」は英語の歌詞を3番まで紹介し、大正15年には間奏を含んだ楽譜『別れ』（訳詩一覧参照）が「音楽新楽譜」に載る。詞は犬童球溪である。昭和2年に「月刊楽譜」に掲載された『親しきジョニイ』（訳詩一覧参照）は初めて原詩の雰囲気を多少伝える内容になった。同じ月刊楽譜の『ベートーヴェンの名曲と珍曲（今月の楽曲解説）』で、解説者の首藤君敦は『藤原義江氏愛吟の曲である。彼は最後の独唱会にも之を帝劇で歌って大好評を博した』と述べている。^{注21)}

『モルモット』や『7重奏曲』の編曲をはじめ、多くのベートーヴェンの曲は合唱譜の形で印刷されている。作品48の4『自然における神の栄光』が合唱曲として広く流布していた事とは異なり、いまだに他の曲の合唱譜は探し出せていない。しかし『菊の盃』の楽譜に、2種類のドイツ語歌詞（上述）が見られることから考えて、ドイツでは当時の合唱運動と連動して歌曲や器楽曲が合唱曲として流布していた可能性^{注22)}はあるだろう。『自然における神の栄光』を含めてこれらの元になった楽譜が誰によって、いつ日本にもたらされたかについても、今のところ判明していない。音楽取調掛時代の蔵書目録にはベートーヴェンの16の歌曲が入っているが、そこには上述した曲は一曲として含まれていないし、フェントンやエッケルトが購入した楽譜目録^{注23)}にはアデライデやフィデリオのポトプリが、旧陸軍軍楽隊所蔵楽譜^{注24)}にはトルコ行進曲その他の楽譜はあるものの、これらの曲は見当たらない。今後、追求すべき課題であろう。現時点で楽譜は見つかっていないが、楽譜につけられた広告ページと遠藤宏の著作から判明した曲がある^{注25)}。作品118の『悲歌』で、東京音楽学校の演奏会で日本語の歌詞をつけて取り上げられている。『別情』：（明治34年7月6日卒業式；明治35年3月29日甲種師範科卒業式、旗野十一郎作歌（絃樂伴奏）、『君 逝きぬ』（大正3年10月17、18日学友会恤兵演奏会絃樂付き合唱）。出版は『月刊楽譜』第5巻1号（大正5年）に掲載された広告から、大正5年と思われる。

3) 『月光の曲』出版

明治時代の出版で特筆すべきは『ピアノ・ソナタ作品27-2（月光）』であろう。すでに西原が語り^{注26)}、福本が抽出したように^{注27)} 明治期には「ベートーヴェン＝ムーンライト・ソナタの作曲者」という認識があった。東京音楽学校の演奏会記録^{注28)} では明治29年4月18日に遠山甲子、明治31年1月31日に同じく遠山甲子、明治35年5月6日にはケーベルによって演奏されている。『月光』は演奏回数も多いが、そのロマンチックなエピソードが、雑誌に繰りかえし掲載される。明治30年代の音楽雑誌に現れた『月光』関係の記事は以下の通りである。

『音楽之友』：2巻4号：巖本捷治：ムーンライトソナタ 嫦娥之曲を論じてベートーヴェン氏の人格に及ぶ（明治35年楽

友社)

『音楽之友』4巻1号：寺井天来：「ベートーフェン氏『月光の曲』の由来」(明治36年楽友社)

『音楽』11巻2号：(口絵) ムウンライト、ソナタ作曲中のベートーヴェン(明治39年楽友社)

『音楽』11巻2号：乙骨三郎：名曲月の光(楽史)(明治39年楽友社)

一方、楽譜としての『月光』は明治40年に雑誌『音楽』に4回にわたって全曲が掲載されるはずであった。(12-3, 12-4, 12-6, 13-1号)しかし、13巻1号の楽譜は12巻6号に掲載されたものと重複しており、掲載しなおした形跡がないため、第3楽章は曲の半ばまでで掲載は完結しなかった。

明治42年8月、楽友社を引き継いだ音楽社は『月光』の楽譜を出版する。(所蔵国立国会図書館)
タイトルページの記述は縦書きで「樂聖ベエトウゼン作 月光」、楽譜第1ページの上段は

「月光 / SONATE / MOON LIGHT / (Sonata quasi und Fantasia) / Op. 27, No. 2 / Der gräfin Julle Gaicchiardi gewidmet / LUDWIG VAN BEETHOVEN」であった。SONATE はドイツ語表記だが、その下の MOON LIGHT は英語表記、献呈者の Giulietta Guicciardi のスペルは間違っているし、gewidmet は途中で2つの単語に別れてしまっているという、なんとも奇妙な表記の仕方であった。これには楽譜のみのヴァージョンと解説つきヴァージョンがあるが、解説には明治39年に雑誌『音楽』11巻2号に載った乙骨三郎の「名曲月の光(楽史)」と「ベエトウゼン(評論)」がそのまま使われた。ただし、乙骨三郎の名前はどこにも記載されていない。楽譜も明治40年の『音楽』に数回に渡って掲載された楽譜と同じものであるが、雑誌掲載の際刷り込んであった雑誌の書誌事項だけが取り去られた。定価は曲のみが30銭、解説つきが35銭だった。

さて、筆者の手元には当館書庫の片隅に眠っていた同じ『月光』の最終ページとぼろぼろに壊れた後表紙が2枚だけある。こちらのほうは、表紙が緑色で、奥付は月刊西歐名曲第15号、明治42年8月3日印刷、明治42年8月10日発行、大正元年11月10日再版発行となっている。この切れ端に運良く『月光』の宣伝文が残っているので以下に紹介しよう。

こは樂聖ベートーベンの傑作なりナショナルリーダーにも載って居る程殆んど國民の常識ともなつて居る有名な曲で和洋古今を通じて斯道の名家が争ひて演奏し争つて聴かむとする優物なり菊二倍二十頁の大曲にて而も第一進動位は誰でも弾ける美にして易なる靈曲也甲種(説明附)卅五錢乙種曲譜のみ廿五錢郵税何れも四錢

この2つの楽譜に大正3年版(北海道教育大学所蔵)と大正10年版(当館所蔵)を加えた5つの『月光』から以下のことが推察できる。

明治40年(当館所蔵)：『音楽』に途中まで掲載 出版は楽友社

明治42年(国立国会図書館所蔵)：出版は音楽社(以下同様) タイトルページ「樂聖ベエトウゼン作 月光」 広告ページなし

大正元年(断片のみ)：タイトルページの記述を変えた再版：「月刊西歐名曲増刊 樂聖ベエ

トウゼン作 月光 表紙の色は緑 広告ページあり

大正 3 年（北海道教育大学所蔵）：再版 表紙の色は白 広告ページなし

大正 10 年（当館所蔵）：第 6 版出版 表紙の色は白 広告ページあり

説明付き楽譜の価格は明治 42 年から大正 3 年までが 35 銭、大正 10 年には 50 銭に上昇している。大正 6 年の物価騰貴が原因であろう。

なお、広告ページからはこの出版社が次々にピース形態の楽譜を出版していったことがわかるのだが、現在、これらの楽譜のうち所在が確認できるのはこの『月光』1 曲である。当館所蔵分（大正 10 年再版）の宣伝ページに挙げられた曲のうち、ベートーヴェンに關係するのは以下の 3 曲であるが『メヌエット』は曲の確定が現時点では困難である。

メヌエット バイオリン合奏曲

哀歌 合唱及び弦楽合奏曲：上述した「作品 118」

月光の曲（バイオリン曲）

最後に印刷方法について簡単に触れておきたい。『月光』は活版印刷の方法によっている。西洋の楽譜印刷は活版から始まったが、16 世紀終わりに彫版による安くて便利な方法が導入されるや、主要な印刷方法は殆ど彫版に変わってしまった。活版を長らく守りつづけたブライトコップフ・ウント・ヘルテルも、他の出版社と競合できなくなって彫版への転換を余儀なくされる。さらに 18 世紀末に発明されたリトグラフによる印刷が導入されると楽譜印刷の世界から活版印刷が消えてしまったかのような印象が持たれるが、実際は特定の分野で使われていた。讃美歌、歌集、祈祷書、カンタータ、オラトリオ、雑誌形態の楽譜、雑誌付録の楽譜、それに指導書である^{注29)}。『月光』は、そのような譜本が比較的単純である讃美歌や、歌集、指導書に都合の良かった活版印刷術で製版されたわけだが、さぞかし大変だったと推察される。その苦労のあとはいくつもの活字を組み合わせねばならなかった長いスラーやタイ、

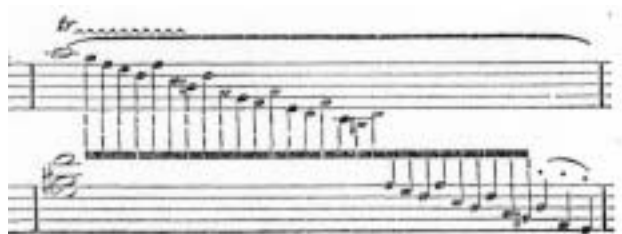
最終楽章最後の上下段にわたる装飾的パッセージに如実に現われている。（図参照）。

この『月光』以外に讃美歌はもちろん、先に述べた近藤逸五郎の独逸名曲集も同じ活字による活版印刷である。現在まだ調査は行き届いていないが、活版印刷は

明治 17 年発行の讃美歌で使われたのを皮切りに大正 12 年頃まで様々な楽譜を作り出した^{注30)}。讃美歌を印刷するために輸入された活版の技術は宗教を越えて日本の洋楽受容を助けたのである。

4) 第九交響曲の楽譜

『第九交響曲』の楽譜は他の交響曲のピアノ譜とともにすでに音楽取調掛時代に日本に入ってきてい



た^{注31)}。メロディーはほとんど順次進行で、転調もなく、複雑なリズムもない讃歌の形式を持った第九の合唱部分は明治時代の唱歌にまさしくふさわしい印象を受けるのだが、意外にも、歌曲や他の器楽曲が明治・大正期を通じて唱歌や歌曲集、合唱曲集に収録されたのに比べると楽譜として広まったのはかなり遅い。ここでは昭和20年までではなく、現在に至るまでの流れを追ってみたい。

日本ではじめての第九の楽譜出版は昭和2年(1927)、シンキョウ社から第九の合唱部分だけのピアノ・ヴォーカル・スコアから始まる。歌詞はドイツ語だが、乙骨三郎の手になる詳細な解説とともに日本語の対訳が掲載された。ベートーヴェン没後100年の行事が華やかにとりおこなわれた年であった。

この出版が契機となったかのように、『第九』の合唱部分は次々に紹介される。昭和5年、春秋社の世界音楽全集第8巻世界合唱曲集。邦訳はバリトン歌手の矢田部勤吉であった。(訳詩一覧参照)この訳詩は昭和12年12月1日の東京高等音楽学院(現国立音楽大学)と新交響楽団による演奏会でも使用された。邦訳による初めての演奏会で、矢田部はバリトンソロを勤めた。

昭和6年(1931)、『讃美歌集』第140番に『第九』のメロディーが使用される。(訳詩一覧参照)日本の讃美歌がお手本としていたアメリカやイギリスの讃美歌には『第九』のメロディーが入っている歌集が多いが、明治期に出版された数ある讃美歌集に『第九』はまったく現れない。他の曲がいくつか日本の讃美歌集に採用されていることを考えると、これも不思議な気がする。しかし昭和6年の讃美歌集改訂のときに、今まで使われていたメロディーに替わって『第九』が第140番として採用された^{注32)}。昭和2年のベートーヴェン没後100年祭が契機となったためかどうかはわからないが、無関係とも思われない。

昭和7年からは女学校や男子中学の教材としてさまざまな歌詞で登場する。昭和9年春秋社の世界音楽全集第76巻交響曲集IIIで初めて第九の全曲がピアノ譜で出版され、昭和15年初めて全曲スコアが出版される。この年、紀元二千六百年が賑やかに祝われた年は、『第九』を含めたベートーヴェンの楽譜の出版ブームであった。

戦後、昭和22年(1947)に第九の合唱部分は小学校6年の指定教材になる。歌詞は岩佐東一郎による新生日本にふさわしく明るく平明で、小学生に歌いやすい口語体である。平成7年(1995)新学習指導要領によって共通教材が廃止され、岩佐の訳詞は教科書から姿を消すが、他のさまざまな曲集には依然として掲載されている。約40年にわたって教科書に掲載されたためであろうか、岩佐の歌詞である「はれたるあおぞら」は『第九』の代名詞の様に日本人に浸透している。昭和31年(1956)に堀内敬三は二度目の訳詞を作る(訳詩一覧参照)。楽譜は上段にドイツ語を、下段に日本語の歌詞が付された全訳で、シンキョウ社による『第九』から19年後に現れた教科書によらない商業出版である(音楽之友社、1956)。同社の世界大音楽全集にも収められ、現在も増刷を繰り返しているロング・セラーでもある。昭和62年(1987)、なかにし礼による新たな歌詞が制作される(東京音楽社1987年)(訳詩一覧参照)。売れっ子の作詞家らしい口語体による自然な流れを持った訳詞である。

第九の楽譜出版は、程度の差はあれ、日本語の歌詞が、原詩の形をかなり反映している。楽譜出版の時期が昭和に入ってからと遅かったために「嵌め込み唱歌」の伝統が薄れていたこと、出版の前に実際

に演奏会が開かれて、人々に大きな感動を与えていた点、最初に出版された楽譜がドイツ語の原詩に解説という形をとっていたことなどがその原因と思われる。

最後に出版はされなかったが日本で初めての第九交響曲のレコードにつけられた訳詩を紹介しておこう。昭和 18 年（1943）には、詩人の尾崎喜八による《「歓喜に寄する」賛歌》が作られる。（訳詩一覧参照）これは第九の第 4 楽章だけをビクターで録音して販売した日本人の手になる初めてのレコードであった。尾崎は音楽に精通した詩人として名高く、音楽関係の訳書や散文も多く残している。原詩にかなり忠実な全訳である。

没後 100 年目の『第九』、小学校 6 年の指定曲になった『第九』、堀内敬三の訳詞による『第九』を経て年末の第九演奏会は今や日本の年中行事になった。季節ごとにさまざまな催しに彩られる日本の暦に『第九』はすっかり根をおろしたようである。

おわりに

昭和 20 年までのベートーヴェンの出版楽譜を見てみると、日本が洋楽を受容していった一側面が見えてくる。第一に明治時代に盛んに行われた「嵌め込み唱歌」が、年を経るごとに原曲そのものの紹介に移ってゆくことである。二番目として、限られた曲が繰り返し出版され、またさまざまな編曲で提供された事実である。三番目に今日の私たちからみると、意外な曲が非常に早い時期に紹介されていることに驚かされる。そのほとんどは東京音楽学校の演奏会曲目に取り上げられたことが楽譜の出版につながっている。『第九』の出版が昭和に入ってからと遅かったのも日本における全曲初演が大正 13 年という事実と関係すると思われる。最後に昭和 5 年から始まった春秋社の世界音楽全集の果たした役割である。全 95 巻（別巻 5 巻を含む）にわたる出版は日本にベートーヴェンだけでなく、ほかのクラシック作曲家の作品についてかなりまとまった情報を提供することになった。

ベートーヴェンの、というより日本の楽譜出版は、かなりの部分が教科書や補助教材の中で行われていた。唱歌として歌われた歌以外に、鑑賞曲として、実にさまざまなクラシックの曲がとりあげられており、時には楽譜も掲載されていた。演奏会に足を運んだり、音楽専門雑誌を講読したり、自らも演奏したりする積極的なクラシックファンだけではなく、もっと広い層を相手としていた。この中の何パーセントかが卒業後学校時代に習い覚えたベートーヴェンから本格的なクラシックファンになったかもしれない。ならなかったとしても無意識のうちに刷り込まれてしまうような受容が行われていたといえる。いまや『第九』は年末の風物詩になり、さまざまなコマーシャルにまで使われているが、小学校の教科書に取り上げられなかったら、このような現象は生じなかっただろう。

もとより完全に調べつくすことはできない。東京音楽学校の演奏会記録は日本の洋楽受容史を語るときに欠くことのできない資料であるが、その中に記されたベートーヴェンの演奏記録のうち、楽譜の出版が見当たらない楽曲^{注 33)}は曲の特定ができていない。また、演奏会の時期とそれに相当する楽譜の出版時期がかなり隔たっていることもある^{注 34)}。今後の見直しと再発見に期待したい。

しかし楽譜出版を追っていくことで発見できた事柄は多い。この分野はあまりにも洋楽受容史研究で言及されることがなかった。その理由は範囲が広すぎ、しかも初期の出版では作曲者の名前さえ書かれていない場合があり、記されている、原曲を明記してあることのほうが珍しいからだろう。さらに少なくはない出所不明の曲が状況を一層複雑にしている。明らかに、偽作とわかる曲もあるが、もしかしたら調査者の知識のなさにその原因があるのかもしれないし、筆者がこの調査のために作成したインデックス表に漏れているメロディーの可能性は否定できない。

さまざまな曲集の調査過程で、筆者はベートーヴェン以外の多くのクラシック作品と出会った。ベートーヴェンと並んで目に付いたのはモーツァルト、ウェーバー、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ヴァーグナーといったドイツ系の作曲家たちの作品である。当初はベートーヴェンとともに記録していたが、すぐにこの試みは放棄せざるを得なかった。莫大な量に対応できなかったのである。

ベートーヴェンは一つの事例として、楽譜出版からみた洋楽受容史を語るのに実に適切な素材だった。この調査が先行する受容史研究を補完できたら幸いである。

- 注1) 西原稔 『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』平凡社、2000
- 注2) 福本康之 「日本におけるベートーヴェン受容」『国立音楽大学音楽研究所年報 13、14、15、16号』、1999-2002
- 注3) 『ベートーヴェン全集 第十巻』講談社、2000 以下の3つの論文を掲載（西原稔「わが国のベートーヴェン受容の歴史」pp.103-112。大角欣矢「第九交響曲の『日本初演』—坂東俘虜収容所における《第九》を中心に—」pp.113-123。福本康之「楽聖の年—昭和二年の没後 100 年祭」 pp. 124-131）
- 注4) 手代木俊一『明治期讃美歌・聖歌集成』大空社、1996-1998
- 注5) 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第一巻』音楽之友社、1987。楽譜資料 p.56 に楽譜が掲載。
- 注6) 遠藤宏『明治音楽史考』有朋堂、1948 p. 165
- 注7) 前掲書 p. 312.
- 注8) 西原：前掲書 pp. 387-378
- 注9) Kinsky, Georg. *Das Werk Beethovens. Thematisch-bibliographisches Verzeichnis seiner sämtlichen vollendeten Kompositionen*, Completed and ed. Hans Harm. München Duisberg: G Henle, 1955. p. 115
- 注10) 中村洪介『近代日本洋楽史序説』東京書籍、2003. p. 790
- 注11) 中村：前掲書 p. 782
- 注12) 近藤逸五郎『独逸名曲集』Josando、1903
- 注13) 坂本麻実子「近藤朔風とその訳詞曲再考」『富山大学教育学部紀要A（文科系）No. 50（1997）』p.19
- 注14) 西原：前掲書 p. 210

- 注15) 東京芸術大学百年史編纂委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇 第一巻』音楽之友社、1990.
p. 629
- 注16) 前掲書 p. 161
- 注17) 前掲書 p. 339 乙骨三郎の訳詩の出版は、現時点では昭和2年とかなり遅い。筆者の見落とし、あるいは未発見の可能性があろう。
- 注18) 前掲書 p. 617
- 注19) 前掲書 p. 618
- 注20) 前掲書 p. 616
- 注21) 月刊楽譜 16(3) p.91
- 注22) 渡辺裕「ベートーヴェンの『もう一つの聴衆』」『ベートーヴェン全集 第十巻』講談社、2000。
P.170-には19世紀ドイツにおけるさまざまな編曲楽譜の出版例が挙げられている。
- 注23) 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』多賀出版、1993. p. 536-
- 注24) 『警視庁音楽隊所蔵旧陸軍軍楽隊明治期楽譜データベース スコア篇』日本近代音楽館編
2000
- 注25) 遠藤：前掲書 p. 40
- 注26) 西原：『ベートーヴェン全集』第10巻 pp. 108-109
- 注27) 福本：前掲書 14号 p. 118
- 注28) 百年史編纂委員会編：前掲書 pp. 29-118
- 注29) Gamble, William. *Music engraving and printing*. Da Capo, 1971. p. 169
- 注30) 筆者が現物を確認できた限りでは明治10年代の幼稚園唱歌や小学唱歌集、明治20年代の中等唱歌集、帝国唱歌集はすべて木版印刷である。『音楽教育成立への軌跡』（音楽之友社、1976）グラビアには小学唱歌集の版木写真が掲載されている。一方、活版印刷の導入は明治17年（1884）の『譜附基督教聖歌集』（ファクシミリが明治期讃美歌・聖歌集成第15巻所収）を皮切りに讃美歌はそれまでの木版から活版に代わってゆく。商業ベースの出版に活版が導入されるのは筆者が見た限りでは明治34年の『女學唱歌』が初めて大正12年まで続く。大正12年代の『月刊楽譜』は活版と平板が混じっているが、同年12月の『月刊楽譜』になると楽譜印刷はすべて平板に変わってしまう。
- 注31) 音楽取調掛時代所蔵目録 (1) 洋書・楽譜
- 注32) 津川主一『讃美歌作家の面影』教文館、1935. p.312. 津川は「ベエトウフエンやバッハの音楽こそ、出来るだけ多く讃美歌曲に書きなほされて、唱はるべきであらう」と述べている。
- 注33) その例として次の2つの演奏会がある。
洋琴聯弾『新家屋祝賀曲』明治23年5月7日開校祝賀会
男聲合奏 別れの歌、戦士の合唱：大正14年5月23日 学友会第41回土曜演奏会
- 注34) 注16参照

訳詞一覧『自然における神の栄光』

君は神 里見義 (明治 22 年)

きみは神、あらひと神、あめつちしろしめす、
大君が御稜威、あふぎたふとめ、みなひと。

つきひも、君が光りとなる、実にげにいとかしこ
や。

海のごとく、陸のごとく、千代ませ我君、八千代
もいませや。

(2 番省略) 注) ルビは筆者による

麗異 近藤逸五郎 (明治 40 年)

おごそか かみ みいづ みそら
莊嚴の神のみわざ、万象一切歡喜び、
讃頌歌天地に満つ。聴け衆生、天つ聲。

たぞをきし星辰の御座、たぞかゝげし日輪。

たぞくだす、涯しれぬ、蒼穹のあなたゆ、

とこひかる光明。

稜威 近藤朔風 (明治 42 年)

おごそか かみ みいづ みそら
莊嚴の神の稜威、蒼空にとゞろき、
海も陸も讃へ唱ふ、聴け衆生、その聲。

たぞ置きし百千の星、たぞ掲げしあまつ日、

たぞ降す、涯知れぬ、蒼穹のあなたゆ、

永遠なる光明を。

神の稜威 門馬直衛 (昭和 4 年)

おごそか かみ みいづ
莊嚴の神の稜威、蒼空にとゞろく。

陸讃へ、海も唱ふ、聴け、衆生、み言葉！

誰ぞ撒きし百千の星！掲げし天つ日！

涯知らぬ大空より、永久輝く稜威よ、稜威よ。

訳詞一覧『忠実なジョニー』

まごゝろの友よ (別歌) 編集者編 (明治 38 年)

さらば別れむ まごゝろの いとしのともよ」
いつかはこゝに またもや見うる

な
汝がかげを まごころの わがゆかしの』

(2,3 番省略)

こほろぎ 與謝野鐵幹 (明治 43 年)

な
鳴ける鳴ける こほろぎは 鳴ける鳴ける
いりひ
入日のなかに 藁のふしどに

つき
月のあかりに さかぐらの さけの香に

(2 番省略)

松の葉 竹折錫 (大正 5 年)

まつばお ゆふぐれ かね
松葉落つる夕暮の鐘のひびき

ゆきかひ馴れし 木陰のいまを

たちにし袖に消えなづむ 露の色

(2 番省略)

別れ 犬童球溪 (大正 15 年)

(甲) (独唱)

さらば君よ 親しの君 さらば別れん

(乙) (合唱)

愛でにし花に ながめし月に

思ひ出でよ 親しの君 思ひ出でよ

(2 番省略)

あゝ何地行く 乙骨三郎 (昭和 2 年)

「あゝ何地行く 我が友よ。あゝ何地行く。」

『五百重の雲の 隔たる彼方

私はたどる 都路へ 學校へ。』

(2 番省略)

親しきジョニー 作者不詳 (昭和 2 年)

『帰りますは、親しきジョニー 何時の日にぞ。』

『稲田はみのり 木の葉も散れば

また来るよ、いとし君、また来るよ。

(2,3 番省略)

訳詩一覧『第九交響曲』合唱部分

主イエスキリスト 昇天 (昭和6年)

あめには御使^{みつかい} 喜び歌え、
つちには世の人^{つげ} み告をきけや。
わが君この日ぞ 死にかちませる、
いのち^{いのち} 生命もまことも 道^{みち}もイエスなり。

(2 番省略)

喜びの歌 岩佐 東一郎 (昭和22年)

晴れたる 青空 ただよう雲よ、
小鳥は 歌えり 林に森に。
こころは ほがらか よろこびみちて
見かわす われらの 明かるきえ顔

(2 番省略)

歓喜に寄する 矢田部勁吉 (昭和5年)

神の御光 天つ姫君
燃ゆる心もて 我はまみえむ
汝が不思議のわざ、離れかしを結び、
諸人こそりて 同胞となる

歓喜の歌 堀内 敬三 (昭和31年)

かんき^{かんき} 神の火^{あまつおとめ} 天津乙女よ
迎えよ 我らを 光の殿へ^{との}
な^な 汝が手の 結ばん 奇しきあやに^{くす}
生きとし生くなる 人みな友ぞ

(以下省略)

「歓喜に寄する」賛歌 尾崎喜八 (昭和18年)

よろこび^{よろこび} 聖なる 神の焰^{ほのお}よ、
輝く 面もて 我等は進む。
裂かれし 者等を 合はず汝が手に、
もろびと 結びて 同胞となる。^{はらから}

(2, 3 番省略)

歓喜の歌 なかにし礼 (昭和62年)

愛こそ 歓喜に みちびく光
さえぎる 苦難を 超えて進まん
歓喜の^{いただ} 頂き 踏みしめた時
われらは 兄弟 世界は一つ

(以下省略)

表について

表の記述は作品番号、楽譜掲載名、訳詩者、年代、曲集名、出版社、形態、所蔵、その他で、作品番号順に並べ、ソナタ集は表の最後に置いた。

所蔵の項目のうち、「Ad.」の表示は広告から得た情報を指す。また、アルファベットで始まる資料はすべて国立音楽大学図書館所蔵分である。表紙や目次に記してある曲名と楽譜ページに書かれた曲名が異なっている場合は、楽譜ページの曲名を採った。また、日本語と原題、あるいは英語名が併記されているときには日本語名を採った。

同じ訳詩者による曲が何度もさまざまな出版に登場する場合が多い。煩雑を覚悟で、あえて全て掲載したが、再版は省略した。調査の過程で、ベートーヴェンと記されているものの、現段階で出所が不明な楽譜がいくつか見つかったが省略した。機会があれば取り上げてみたい。